

解過程で分解菌が増殖し、ノコ屑も同時に分解されるプライミング効果 (Priming effect) を期待すべきである。

ロ. ポット育苗と堆肥 熱帯地方では多くの場合ポット育苗されている。ポット用土壌は人工培土であり、① 保水性の大きい土壌を調製し、② 肥料成分は事前に施し、土壌と肥料を十分なじませることが必要である。保水性を高めるには、完熟した堆肥と土壌の混合が望ましい。また、ポット用土の肥料濃度が高ければ“肥料やけ”を起こす恐れもある。このためにも堆肥が必要である。

マツ類のポット育苗にはポット用土としてマツ類の菌糸束の発達した土壌の混合は効果的である。この場合には、土壌、菌根菌土壌、堆肥を混合し、低温条件下での培養が有効である。菌根菌の肥料的效果は大きい。また培養土に木炭粉末の混合も可能である。木炭粉末はすでに土壌改良資材として認定されており、また、菌根菌の発達に適した資材である。

以上 CEDEFO 苗畑での堆肥作りの経験から主として木質物を含む有機質資材の堆肥化について述べさせていただいた。堆肥の作り方はすでに確立されているが、リグニン含量の多い難分解性木質物は堆肥資材として取除かれていた。とくに熱帯性樹種は水溶性物質も多く、石灰処理によって生長阻害物質を取り除くことも重要である。堆肥作りやポット用土壌について海外派遣専門家の参考になれば幸いである。

新刊紹介

◎ **マングローブの植物学** (P.B. Tomlinson: *The Botany of Mangroves*, 413 pp., 1986. Cambridge Univ. Press, London. \$69.50) マングローブに関する研究はひじょうに多いが、全体を知ることができるものは少ない。世界的に有名なマレー半島のマングローブについては J. G. Watson: *Mangrove Forests of the Malay Peninsula* (1928) があるが、これは今日では入手しにくいし、内容的にも古くなっている。本書は2編に分けられ、はじめの170ページまでは生態、植物地理、樹木の形態および生理、用途などについて概観される。ついで171ページ以下の後半ではマングローブを形成する種子植物35科58属106種、シダ植物1属3種が科別にとりあげられ、豊富な写真、図を用いて種の特徴などが記載されている。多数の文献が引用され、最近の研究を知る手がかりになるのもありがたい。(緒方 健)